

熊本城 復興に向けて

〈15〉戦後の災害と復旧

熊本城は平成28年熊本地震で大きな被害を受けましたが、これまで地震以外にも水害・台風などさまざまな災害に直面してきました。今回は戦後の災害と復旧についてご紹介します。

まず昭和28年(1953)にいわゆる「白川大水害」(626水害)が発生し、集中豪雨によって白川が氾濫、熊本市内は広く土砂に覆われました。当時こうした土砂の処分方法として熊本城の堀を一部埋めましたが、その痕跡は今でも城内各所で見られます。例えば戌亥櫓を直角に取り囲む堀のうち北側(写真上)は、本来深さ12mほどの深い空堀でしたが、水害の土砂で埋め立てられた結果、断面が逆台形の浅い空堀へと改変され、子どもたちが野球やサッカーを楽しめるほどの広場となりました。同様に、古城(現:県立第一高等学校一帯)の堀(写真下)も水害の土砂埋め立てに利用されました。こちらはもともと水堀でしたが、埋め立て後はその景観も大きく変わり、現在では古城堀端公園として市民に親しまれています。

さらに熊本は台風被害も多発する地域です。平成11年の台風18号で西出丸の西大手門(昭和56年再建)が倒壊するなど、台風は熊本城の建造物に幾度となく大きな被害を与えてきました。なかでも全長242.44mに及ぶ長塀(国指定重要文化財)は、その形状から特に大風に弱いため、台風による被害が頻発し戦後も修理を重ねてきました。過去の修理履歴を見ると、昭和28年に西側約82mが倒壊し昭和29～30年に解体修理、昭和34年に東側約60mが倒壊し翌年に解体修理、昭和47年に全面の屋根葺替修理、昭和51年に台風17号で全域が坪井川側に傾斜し翌年に保存修理、平成3年に台風19号で中央約140mが倒壊し翌年に修理、最近では平成26年に馬具櫓台石垣保存修理に伴う西端の修理、平成27年台風11号で控柱(溶結凝灰岩製)が折損、そして平成28



▲戌亥櫓を取り囲む堀(水害の土砂で埋め立て)



▲古城(現:県立第一高等学校一帯)の堀(同様)

年熊本地震で東側約80mが倒壊し平成29年には復旧に伴う発掘調査を実施、といった具合です。

熊本城内でこうした修理工事を行う場合は、まず絵図、地図、古文書または古写真などの資料調査を行い、一方では特別史跡として石垣や地下遺構の保存を前提に確認調査を行います。さらに重要文化財である建造物の修理においても遺構・資料を調査し、補強方法についても工夫を重ねています。このように文献史学・考古学・建築学をはじめ多くの専門家が協力し知恵を出し合いながら、長年にわたって大切な文化財を守ってきました。熊本城の堀や建物には、熊本の人々が過去に経験してきたさまざまな災害と復旧の歴史も刻まれているのです。